プログラム解説

Ｊ.Ｓ.バッハ：無伴奏チェロ組曲 第２番 ニ短調 BWV1008

バッハはケーテン時代（１７１７年～１７２３年）に、６曲の無伴奏チェロ組曲を書いたと考えられています。当時バッハが楽長を務めていた、ケーテンの宮廷楽団のヴィオラ・ダ・ガンバ奏者でチェロ奏者でもあったクリスティアン・フェルナンド・アーベルのために書かれたという説もあります。

当時の組曲と呼ばれる作品は、古典的な舞踏曲を数種集め、ひとつにまとめたものです。無伴奏チェロ組曲の場合、それぞれプレリュードで始まり、アルマンド・クーラント・サラバンド・メヌエット（第３番・第４番はブーレ、第５番・第６番はガヴォット）、ジーグの６曲の構成となっています。

バッハは、チェロという楽器がまだほとんど独奏楽器としての役割を持っていなかった頃に、チェロの朗々とした音色を十分に発揮されるように高度な演奏技術を駆使し、技術的な可能性を追及しながらこの組曲を作曲しました。それゆえに、音楽史上でも大変重要な位置を占めている作品とも言えます。また、無伴奏チェロ組曲はチェリストにとってバイブルと言われ、チェロの旧約聖書にも例えられています。

この組曲の第２番は、無伴奏チェロ組曲全６曲の中で最も繊細で瞑想的な性格が特徴で、とても味わい深い作品です。

プレリュード：４分の３拍子
問いかけるような上行する音型の主題を様々に転調し発展していき、最後は最も力強く五つの重音の連続によって結ばれます。

アルマンド：４分の４拍子
重音や低音部を使いながら重い雰囲気を表しています。

クーラント：４分の３拍子
跳躍するような軽快な感じの曲。

サラバンド：４分の３拍子
同じ音を２本の弦で奏して始まります。後半は、短調の中にも憧憬を感じさせるものです。

メヌエットⅠ/Ⅱ：４分の３拍子
長調と短調の優雅な二つのメヌエットが奏されます。

ジーグ：８分の３拍子
歯切れのよい下行する音型が繰り返され、多声的に展開されていきます。

ベートーヴェン：チェロ・ソナタ　第２番ト短調　Op.5-2

ベートーヴェンは、チェロソナタを５曲残しました。J.S.バッハ以降、初めてチェロとピアノという２つの楽器を対等に扱った､という点で画期的な作品と言われています。そして、バッハの無伴奏チェロ組曲がチェロの旧約聖書に例えられるのに対して、ベートーヴェンのチェロソナタは、チェロの新約聖書とも例えられています。

このソナタ第２番は、ベートーヴェンがウィーンからプロイセンにかけての旅行中の１７９６年半ばにベルリンで作曲されました。初演はジャン・ピエール・デュポールとベートーヴェン自身によって、プロイセンの宮廷演奏会で行われ、楽曲は国王フリードリヒ・ヴィルヘルム２世に献呈されました。

２楽章の構成で、若々しい情感に溢れ、明快で流麗な作品となっています。

第１楽章：アダージョ・ソステヌート・エド・エスプレッシーヴォ（ト短調、４分の４
拍子）－アレグロ・モルト・ピウ・トスト・プレスト（ト短調、４分の３拍子）

当時のソナタの冒頭楽章としては、かなり長大な序奏が楽章主部の前に置かれています。序奏が静かに消えるように終わると、暗い情熱を秘めた主部に繋がっていきます。

第２楽章：ロンド-アレグロ（ト長調、４分の２拍子）
軽快で明るいロンドです。リズミカルで端麗な主題がピアノで奏された後、ニ長調、ハ長調と調が変わりながら挿入句が現れてきます。その後、華やかなパッセージでフィナーレを飾ります。

チェロ・ソナタ　第３番イ長調　Op.69
５曲のチェロソナタのうち、最も広く知られているこのソナタ第３番は、第５交響曲、第６交響曲等と同時期の１８０８年に作曲されました。ベートーヴェンの友人でもあるイグナーツ・フォン・グライヒシュタイン男爵に献呈されています。
この曲の中に表れる主な旋律がいかにもチェロ向きで、どれもが親しみやすく、全体には愛らしさと明るさと輝かしさに溢れています。この感情は、当時ベートーヴェンがヨゼフィーネ・フォン・ダイム伯爵未亡人と恋愛中だったということに関係があったのかも知れません。加えてベートーヴェンらしい激しい情熱と張り切った力もあり、さらに内面的にも極めて充実していて、ベートーヴェン中期の傑作に属する名作と言えるでしょう。

第１楽章：アレグロ・マ・ノン・タント（イ長調、２分の２拍子）
チェロの雄大な第１主題で始まり、ピアノもそれを受けて曲が始まります。展開部では悲劇的な感情が美しく歌われ、再現部を経てコーダが始まると曲は盛り上がりを見せ、そ　　の後チェロの旋律で静かに閉じます。

第２楽章：スケルツォ　アレグロ・モルト（イ短調、４分の３拍子）
ピアノの主題で始まります。シンコペーションを用いた強いリズムの旋律が、チェロとピアノそれぞれに現れ、緊張感を途切らすことなく展開されていきます。

第３楽章：アダージョ・カンタービレ（ホ長調、４分の２拍子）－アレグロ・ヴィヴァーチェ（イ長調、２分の２拍子）
アダージョの序奏部では、チェロらしい優美で大らかな美しい旋律から始まります。その後アレグロに変わり、チェロが軽やかな第１主題を奏した後、明るく軽快に繰り広げられていきます。再現部以降、コーダではピアノの華々しい旋律がフォルティシモになり、チェロとの二重奏を奏で、最後は華々しく終わります。